

編輯部報情閣内
報週真寫

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9



赤々と燃える砲城を圍む、仇の
 痛みも忘れて奔り過ぐす夜の闇
 樂敵陣、奇襲の武勳を遂げたこの
 も此處だ、壯烈な戦死を遂げた戦
 友の思ひ出を、涙と共に語るのも
 此處だ。火明りに、粗豪な故郷
 の團地を思ひ出した一人が、
 「おらが村さ」の涙眼を、紹介し
 たのに初まつて、今宵は、お國自
 慢の花が咲く

2
 13・2・23
 10分



温かき
母國の土

國防婦人會の慰問
「優等の小母さん」國防婦人會の慰問
隊がやつて来た。母の如く、姉の如く
親切な小母さん達（手紙の代筆を頼ま
う）俺は、傷口を包む袋を頼んであつ
たつけ）看護婦さんに助けられ、松葉
杖に身を支へ、玄關迄運へに出ると、
今日は、大好物の「甘い物」接待だ。
めんくらつた笑ひの中に、嬉しく響け
る銃後の眞心



東京海上火災株式會社

開業 明治十二年八月
資本金 七千五百萬圓
諸準備金 一億三百萬圓

營業種目
海上火災 竈子
運送 盜難
自動車 航空
自傷 森林

本社 東京丸ノ内
支店 大阪・神戸
出張所 横濱・福岡
名古屋・上海

カリーテン・テニス
 華へる季節と共に傷も癒へてゆく春の一日、湯浴の地面も何のその、若い戦傷兵士は、懐しい土の上で踊り出した。手榴弾を振った手に、板片のラケットは軽過ぎて、打ち上げボールは、遠くか疎林の中へ！つと起る笑顔。久々にベットの生活の憂鬱が天にはちける。



輪投げ遊戯
 手つと伸ばしても痛まぬ足にも、十分力が入る。「さあ、元気でゆかろせ」恢復の喜びで、氣も舞々と、白衣の勇士達は、輪投げ遊びに興ずる。白衣の天使が投げかける微笑も、今日の陽射しのキラキラに明るい。



白衣のトンネル
 「貴様がかぶると大黒様だな」。「どうも俺はコッタンさんみたいでソツとせん」。「あいつ見ろよ、まるで、家さんの紳士だぞ」。「重い鐵かぶると代る傷兵帽の軽やかさ。日溜に並んで投げあふ唇口さへも軽々と、母の土へ歸つた氣持のほぐれ、淺春の風が白衣のトンネルに若芽の香を送り込む。



小演劇會
 今日は一ツ慰問團を慰問しやうと、今や、高座では南京軒右衛門師が、自作の浪曲を一座然演中であるが、豊満鼓座を死守、名譽の旗を執つた勇士も、言葉の弾丸は射ちまくれず、あたら櫻作が、小母さん達に、腹をかかへさせ、戦友の野次で、噴き舞々。さて此の勇士如何になりませうや、後は明晩のお楽しみ。



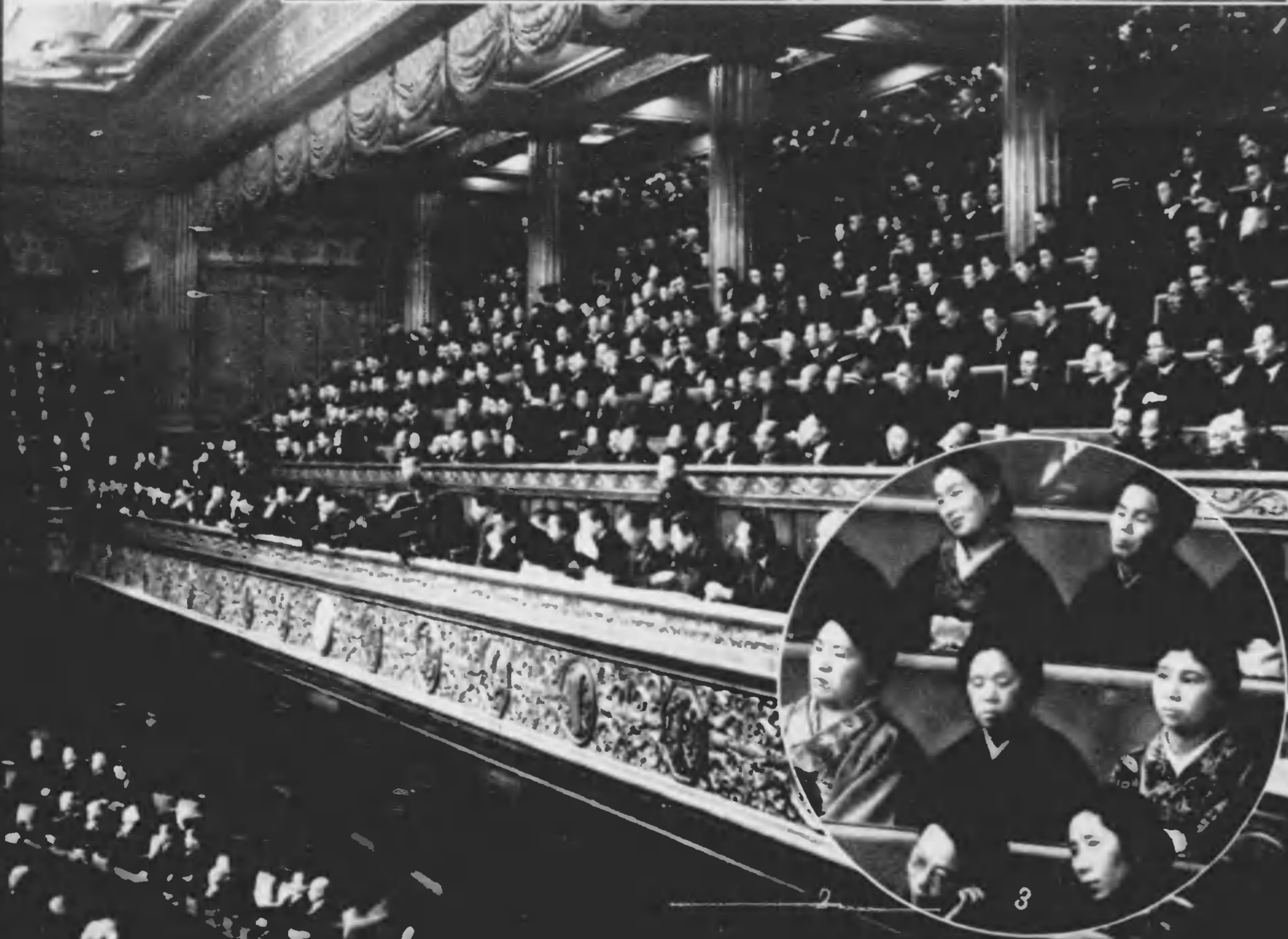
事變下の議會の脈搏



1 銃前銃後一致の眞情、もみにもんだ難算總會も今日が最後、各派の態度は前日きまつて、一から六まで各分科會も漸くすみ、頼いて總會が開かれた。各派代表いづれも原案支持の賛成演説づらならんだ大臣の顔も今日は晴々としてゐる。代議士もほとと安堵をして本會へ(二月二十二日)

2 二十六億餘の大算算が衆議院を通過する日、傍聴席は超議員、仲家の戦線思へばこの位の増額はなんのそのとんな緊張して聴耳をたてゐる。議場は最後の討論、事變下議會はいとも厳肅に進行、議場一致可決、そして貴族院へ(二月二十二日)

3 女性の政治への自覺は帝國黨の離脱に併せて



思想戦から



世界思想分布圖(兼附板)

我々在國思想界の動向、現状を説明する(法司提供)

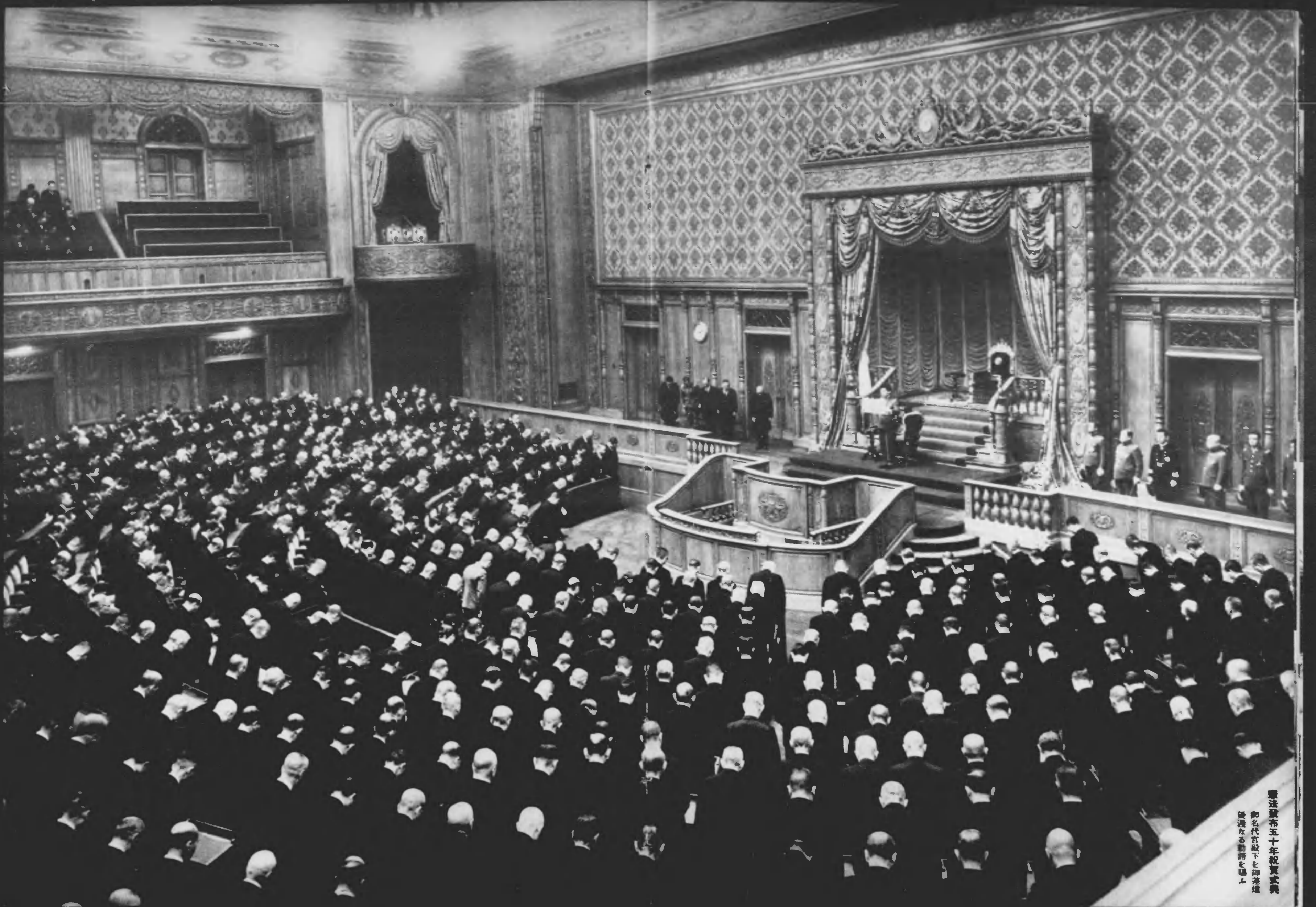


コミンテルンの魔手を發く



蘇聯の赤化宣傳ポスター

思想戦から
思想戦展覽會は既報通り、去る二月九日から東京市日本橋區高島屋に於て内閣情報部主催の下に開催されたが、官民雙方から提供された資料は世界に満ちる思想戦の各種類を示して餘蘊なく此の武器無き戦に對處すべき我等の覚悟を新にせしむるものがあつた。因に同展覽會は来る二十六日迄開かれてゐる。



憲法發布五十年祝賀式典
御名代宮殿下と御差遣
儀漫なる勳節を賜上



4

4 守衛さん達、いつもより一層の緊張ぶり、今朝も寒気をついて議事堂正面に整列。點呼の聲をすみきつた空にたからかにひびかせてゐる。



8 未開地を開拓し自作農を創設して農村生活の安定と向上。そして農業生産力の増進を圖る農地調査法が今議会で提出された。写真は、その委員会。



5 衆議院の議事堂から戦艦の勇士に贈られる日の丸は、武運長久、力の四文字、院内の控室で速筆をふる。代議士。

9 委員会、本課へ戻ると今度は速記だ。一言一句も脱けてはならぬ。聞達つてはいけぬと厳命ぶり。

10 半變下議会はこゝにも、反映して院内郵便局もいそがしい。地方民から代議士への電報電報がひつきりなした。印刷電信機の巻取機が見る／＼うちに減つて行く。



6 電力案は今議事堂の中心、富の永井達利は神経痛の手を三角巾につんで熱心な登壇、後には大和田電気局長が参考書をひもどいてゐる。立てるは外債處理の説明をする賀屋藏相。

7 新聞記者もいそがしい、ザラの原稿用紙に鉛筆がすべる。



8



9



10



見よ！試練の回本、銃後の力

「たくましく手に手揉られて日の丸は輝きあがる」と
揚り朝日を受けて翻騰とひるがへる。下では今も戦線、男
工から女工給仕に至るまで工場前の旗幟に激しい工員達の
激揚と共に轟然と響き正して宮城道雄の雄略、島崎よ
武運長久なれ、我等は誰らん銃後の日本！

東京市深川・神奈川川原町
「烈々と大衆は響きあがり、この日の白ひしやがてこの美事
鐵こそ戦線に響きあがりよつて戦線の火を社くことなら
う。ハンマー執る者も銃後の真鍮をさしと響きあがる。」



「飯は食つた。お飯だが美味かつた。さあ歌はう
ぞ愛國行進曲、胸を張つて元氣よく、一、二、三、
「見よ東海の空明けて……」鉄砲の様な音が鐘音
から工場トタン屋根にはね上る。」

「えいつと振り上げカーン
と打ちあちす鐘は鋼鐵、腕
も鋼鐵、戦場の勇士僅くば
尙のこと身はひきしまる心
は響る。銃後の戦士労働
者の尊き歌。」



「見よ東海の空明けて……」鉄砲の様な音が鐘音
から工場トタン屋根にはね上る。」



爆撃の物語

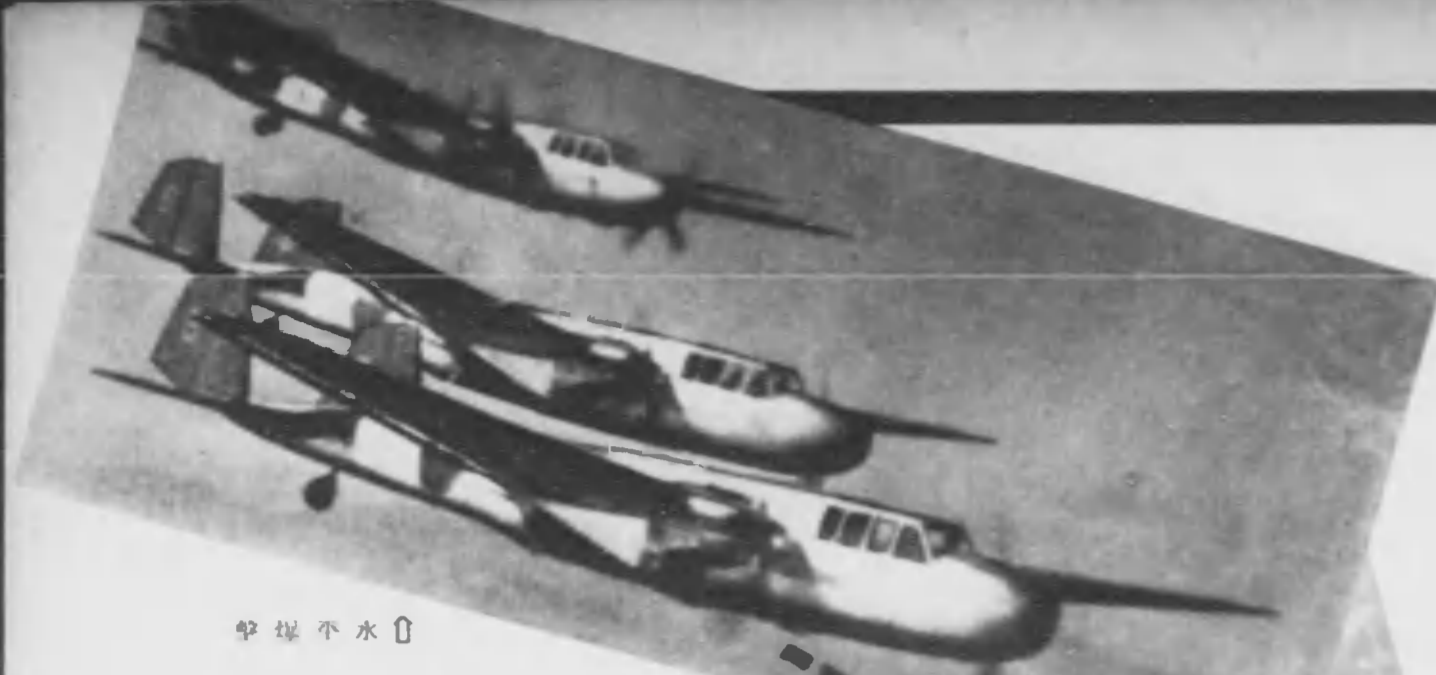
(供提省軍海)

爆撃の目的は誰でも知つてゐるやうに敵の都市や敵部隊、或は敵艦などに爆弾を投下して大損害を與へるにあるが、それは當然大きな機體に重い爆弾を搭載しなければならぬから、はじめのうちは速い速力と機體の運動性に助け、敵高射砲や戦闘機の良き餌食として提供され勝であつた。

ところがこの數年來の爆撃機の進歩といふものは全くめまぐるしいばかりで、今米國で世界に誇つてゐるボーイング二九九型を例にとつて見ると、水平速度は三七〇キロ、三三〇メートルの高速度で三トンの爆弾を積んで九千六百キロを一氣に飛べるといふ。しかも武装は機體四乃至五、かうなると戦闘機の餌食どころか何でも来いと云つた強さで敵の上空に臨めるわけだ。

さて、この爆撃機が敵を爆撃するには普通爆撃目標の上を通過すると、風向、風速、自機の速力などを精密に測定、投下角を決定した上、水平飛行の姿勢で投擲する。しかし、敵陣には幾多の死の狂ひの防空砲火があることを覚悟しなければならないからあまり低空飛行は出来ない。従つて、かうした水平爆撃では搭乗者の優秀な技術を以てしてはなかな

かすばらしい命中率を擧げることがむづかしい。そこで、今事變でもわが航空部隊が好んで使用した急降下爆撃といふ新種の爆撃法が生れた。この方法は、爆撃機自身爆弾になつたつもりで高空からいきなり目標めがけて急降下し、あつといふ近距離で目標に投擲するや急ち高速で舞ひ上る。投擲機を全開にして急降下すると、忽ち七千キロの時速にはなる。今五千メートルの高速度から急降下するとすれば目標までの距離は落下角を六十度として五千七百米メートルになる。機の急降下速度を七千キロ時とすれば僅々三十秒足らずで降下



急降下爆撃

出来るわけだ。このやうに激しい勢で降下して来る爆撃機に對しては敵の高射砲は殆んど役に立たないが、機關銃射撃は降下する機が一點にとゞまつて大砲に大きくなつてくるので、命中率は次第に高くなつて来る。これを避けるために搭乗者は機を背にして敵陣からは見えずに機影がよく認められないやうに突込むのを原則としてゐる。たゞかうした急降下爆撃では人間の體力としては堪えらる限りの速力で降下しながら照準し、投擲し、その上舵を操作して急旋上昇しなければならぬ搭乗者の肉體的苦痛は或る場合には命を捨てるより以上のものであるが、命中率はそれだけにすばらしいものだ。

この他、不意に敵の頭上僅かに二、三十メートルの低空に高速力で現はれて投擲する超低空爆撃法、或は魚形水雷を放つて艦隊を襲撃する雷撃法など、爆撃機そのものの爆撃法の進歩發達は、今後この戦いの生命を制するものとして重要視される一方であらう。



の中行行に隔一爆行機意注に機敵

爆撃場行飛艦南 (日十月一) (較比發前の撃爆)



庫納爆場行飛宮故内城京南 (寫日西十月二十)跡の撃爆

男漢線英德機爆撃 (一月十八日)

急降下爆撃

強イ身體 優シイ心

支那へ行ツテキルオ父サンヤ兄サンニマケルモンカ「ボクノ兄サンブタイチヨウダ」ワタシノオバサン赤十字ヨ
二月ノ風モ、街頭ノ氷モナンデモナイヤイ。オヤツヲ忘レ
イジワルシナイデ、ナカヨクアソベ。リップバナカラダ、ヤ
サシイコロ、アスノニツボンハボクタチダ。



「チキハオッロ屋ノカドダ」ニハ
ナクチヨウツケアタイジシロ

サムカナイヤイ。チキゼ
ントカダイ



ヤチイヨウ、ヨノク捲イターホ
ヨノンスネマイタイ、ヨメダ

ニヒタキハツラ軍進
波ノ旗、ブカーウニタブマ

クカクラフ、キウコヒトトベト
アナイタリノ、クボ



ンヨガンサヨオ！イレンデ
ヨダンハゴ、ルキデ



寫眞週報

昭和十三年三月十一日 第三千九百九十四号 昭和十三年二月廿二日發行 (每週一日本報日發行) 第二號

映画で見る

富士のフィルム

カメラにも

この國産

フィルムを!



唯一の純國産

富士のフィルム

(本書の大きさは規定規格A4判)